

理学療法士の「コミュニケーション技術が課題」とする議論は絶えない。本誌においても、「理学療法における一般的なコミュニケーション技術」(2002年, 入門講座)や「接遇におけるコミュニケーション技術」(2011年, 入門講座)と「コミュニケーション技術」については既に数回にわたり掲載している。この2つの入門講座は、理学療法士が通常業務のなかで必要とされるコミュニケーション・スキル、すなわち症状や病態を評価する専門技術としての問診や各種カンファレンスでのプレゼンテーション、あるいは他職種へのコンサルテーション(相談)やアドバイス(助言)などさまざまな場面に応じた技術について詳細に論じる内容ではなかった。そこで本特集では、これら2つの入門講座を進化させたものとして、理学療法の臨床実践に役立つコミュニケーション技術を解説する。

■心身医療の視点からの面接技術(久保千春論文)

心身医療は良好な患者-治療者関係をもとに、身体療法、生活指導、面接などの心理療法である。面接技法のポイントは、①共振れ(共感的理解)しながら観察する自己、②感情に気づくように反射鏡の役割、③問題点の整理と明確化、④患者ベースを大切にする、⑤態度や表情などの非言語的側面を観察、⑥患者から向けられた転移感情に注意、⑦嫌な言動には病気がさせていると考える、などである。面接は理学療法においても重要である。

■理学療法における問診技術(内 昌之論文)

問診は患者・対象者と理学療法士との信頼関係を構築するうえで重要な過程であり、患者は多くの場合訴えを表出することにより心理的負担が軽減する。問診に際しては、聞きたいことを個別に質問するのではなく、必要な情報について患者が自発的に話し出せるように問いかける。また、単に情報を得るためではなく、コミュニケーションをとるとともに、さまざまな徴候を観察し、他の理学療法評価と統合して臨床推論に役立てる過程である。

■多職種協働に役立つ理学療法士のコミュニケーション技術(山口美和論文)

理学療法士の働く環境は、職域の拡大や勤務体制の多様化などに伴い、他職種との連携がますます重要になってきている。本稿は「多職種協働」をテーマに、「理学療法士」という職業に期待されている役割を再考し、工作上必要となる「対人コミュニケーション力」とは何かを検討する。そして現場で役に立つコミュニケーション技術として、自分も相手も大切にしたい伝え方「アイメッセージ」を紹介する。

■理学療法における患者の動機づけを向上させる技術(鯨岡栄一郎論文)

動機づけは、理学療法場面のみならずリハビリテーションにおける重要な要素である。本人から生まれる主体的な動機が理学療法効果を左右することは言うまでもない。相手の行動を変えるには、その背景にある感情に直接アプローチしていく必要がある。またそれがこれからの理学療法士に必須のスキルと考える。動機づけを効果的に向上させる技術について、コーチングのより実践的な観点から紹介したい。

■理学療法におけるプレゼンテーション技術(片田圭一論文)

理学療法士は、対象者や専門職との適切な関係を築かなければならず、互いに情報を共有し治療の方向性を明確にするために的確なプレゼンテーション能力が必要となる。理学療法におけるプレゼンテーションには、学会や症例検討会などで多数の人たちに行う場合以外に、対象者との良好な関係づくりと情報収集を行う「医療面接」や、経験豊富な専門職に意見を聴き質の高い治療を提供するための「コンサルテーション」がある。